[別紙　2]

審査の結果の要旨

申請者氏名

氏名　　藤井まい

本研究は, 排卵誘発剤を使用していない配偶者間精子注入法（AIH）の周産期のアウトカムを評価し, 新生児にリスクはないか検討することを目的として行われた。指標は, 周産期死亡, 低出生体重(LBW)児率, 週数換算低出生体重(SGA)児率, 形態異常児発生率, 及び男女比の 5 つであり、下記のような結果を得られている。

1. 対象者の特性
自然妊娠による単胎児数は 53,939, 配偶者間精子注入法（AIH）後の単胎児数は 576 だった。平均年齢は自然妊娠群で 30.9±5.0 歳（平均値±標準偏差）, 精子注入群で 34.7±3.9 歳（平均値±標準偏差）で精子注入群のほうが高かった。平均妊娠週数は自然妊娠群で 38.2±2.7 歳（平均値±標準偏差）, 精子注入群で 38.1±2.9 歳（平均値±標準偏差）であった。

2. 周産期死亡
周産期死亡は精子注入群で 10（1.7%）及び自然妊娠群で 596（1.1%）であり,割合の差は有意ではなかった。粗オッズ比, 及び分娩時の母親の年齢, 妊娠週数, 前置胎盤, 母体基礎疾患を調整したオッズ比も有意でなかった。

3.　低出生体重（LBW）児率
低出生体重児は 自然妊娠群で 9,143（17.1%）, 精子注入群で 114（20.0%）であった。これらの群間の割合差は有意ではなかった。粗オッズ比, 及び分娩時の母親の年齢, 妊娠週数, 前置胎盤, 母体基礎疾患を調整したオッズ比も有意でなかった。

4.　週数換算低出生体重（SGA）児率
週数換算低出生体重（SGA）児率は精子注入群で 102（17.9%）及び自然妊娠群で 6,318（11.8%）でった。週数換算低出生体重（SGA）児率の割合は精子注入群において有意に高いことが認められた。精子注入群を自然妊娠群と比較した時の週数換算低出生体重（SGA）児のオッズ比は 1.63（95%信頼区間 1.31-2.02）であった。分娩時の母親の年齢,前置胎盤,母体基礎疾患で調整したオッズ比は 1.66（95%信頼区間 1.33-2.06）であった。

5.　形態異常児率
児の形態異常率は精子注入群で 7（1.2%）及び自然妊娠群で 1,070（2.0%）であり, 割合に有意な差は認められなかった。精子注入群を自然妊娠群と比較した時の児の形態異常のオッズ比も有意でなかった。分娩時の母親の年齢, 妊娠週数, 前置胎盤, 母体基礎疾患を調整したオッズ比も有意でなかった。

6.　男女比
精子注入群では男児の出生が 289（50.9%）, 女児の出生が 279（49.1%）であった。自然妊娠群では男児の出生が 27,419（51.3%）, 女児の出生が 26,067（48.7%）であった。これらの群間の割合に有意な差は認められなかった。精子注入群の自然妊娠群に対する男児出生のオッズ比も有意でなかった。分娩時の母親の年齢, 妊娠週数, 前置胎盤, 母体基礎疾患で調整したオッズ比も有意でなかった。

以上、本研究は、配偶者間精子注入法（AIH）後の周産期アウトカムを評価し、週数換算低出生体重（SGA）児では治療群においてリスクが高いことを明らかにした。本論文は不妊治療後妊娠の周産期リスク評価の点で学術的意義が高く、周産期、及び新生児ケアの点で臨床的有用性をも兼ね備えており、学位の授与に値するものと考えられる。